

なんいひて雲手に渡せる橋の名所ありと聞えしを尋させ給ひ、今は跡ばかりにて、その澤に杜若のみありと聞しめして、

八橋やむかしにおもひ出されて残せるさはのかきつばたかな

○按ズルニ、此歌、徳川氏御實紀附録ニ引ク所ノ上洛記ニハ、八橋やはしはむかしに成ぬれど残るは澤のかきつばた哉トアリ、

〔湘泰紀行〕牛田村を過る時、路傍の右なる田の中に八橋の舊跡あり、杜若もなく、橋もなし、僅に其名の存せるのみ、

〔所歴日記〕昔は沼なりつるに依て、淺き處に橋柱を立て、深みを避けて淺きにうつりて掛たる橋なれば、八ツ曲りたるになむ有ける、されば八橋と云傳へたと語る、橋邊に由ある墓あり、其上に古びたる石塔あり、此塚の主は業平なり、過にし比大納言光廣卿、四方をらじ昔の下には唐衣著つ、馴にし跡幕ふとはとよみて手向け玉ふと語る、予が云、在五中將は爰にて身まかりたる人にあらず、いかでゑるしの塚のあるべきやと問へば、さればにや僞墓といふと答ふ、

〔東行別記〕八橋

名におふ三河の八橋は、こゝぞその古跡なりと人のをしへけれど、名ばかりにて今はそのゑるべだに残らず、かの業平のむかしがたりのみぞまのあたり見るやうに覺え侍る、
ふりにたるあとだに消ぬかきつばた言葉の花を千代にのこして

〔垂加草〕遠遊紀行

八橋

自羽林題杜若情、千年不朽八橋名、我來却誦聖門訓、禮樂爲邦放鄭聲、

〔都紀行〕二日○文久四年正月、中略八ツ橋へ行道のあるに、車おりたちて立寄侍れば、八橋山無量寺とい